

きのうときょう

——音楽が家庭にもたらすもの——

宮本百合子

青空文庫

この間日比谷の公会堂であつた自由学園の音楽教育成績発表会へ行つて、それについての様々な感想につれて、自分たちが小さかつた頃の生活のうちに、音楽がもたらしたあれこれの情景をなつかしく思いおこした。

もうふた昔三昔のことで、私が五つぐらいと云えば明治三十年代の終りから四十年代のはじめにかけての時期になるが、その時分うちに一台のベビイ・オルガンがあつた。五つをかしらに三人の子供たちをそのぐるりにあつめながら、バラの花簪などを髪にさした母のうたつた唱歌は「青葉しげれる桜井の」だの「ウラルの彼方風あれて」なのであつた。当時、父は洋行中の留守の家で、

若かった母は情熱的な声でそれらの唱歌を高くうたった。母自身は娘時代、生田流の琴と観世の謡とをやつて育つたのであつた。

九つになつた秋、父がロンドンからかえつて来た。その頃のロンドンの中流家庭のありようと日本のそれとの相異はどれほど劇しかったことだろう。父は総領娘のために子供用のヴァイオリンと大人用のヴァイオリンを買つて来た。ハンドレッド・ベスト・ホームソングスというような厚い四角い譜ももつて来た。ニツケルの大きい朝顔のラッパがついた蓄音器も木箱から出て来た。柿の白い花が雨の中に浮いていたことを覚えてゐるから、多分その翌年の初夏ごろのことであつたろう。父は裏庭に向つた下見窓の板じきのところに蓄音器をおいて、よくひとりでそれをかけては

聴いていた。そういうとき、何故か母はその傍にいず、凝つと音楽をきいている父の後姿には、小さい娘の心を誘つてそつとその側へ座らせるものをもっていた。四十を出たばかりであつた父は、黙つて娘の手をとつて自分の手のなかへ握り、そのまま膝において猶暫く聴いていて、レコードをとりかえたりするとき「どうだい、面白いかい？」ときいたりするのであつた。

やがて、レコードのレッテルの色で、メルバの独唱だのアンビル・コーラスだのいろいろ見分けがつくようになり、しまいには夕飯のあとでなど「百合ちゃん、チクオンキやる」と立つて変な鼻声で、しかも実に調子をそっくり「マイマイユーメ、テンピンホー」などと真似した。母は苦笑いした。今思えば、その声も歌

詞もキャバレーで唄われたようなものであつたろう。更に思えば、当時父の持つて来たレコードもどちらかと云えばごく通俗のものであつたと考えられる。オペラのものやシムフォニーのまとまつたものはなかったように思われる。

程なく、ピアノの稽古がはじめられた。ヴァイオリンをやるにしろ、基本はピアノだというような話がされていた憶えがある。

先生は久野久子さんであつた。上野を出たばかりでまだ教えるのではないが、というようなところを特別にたのみ、家が三丁ほど離れた同じ本郷林町のお宅へ通つた。やっぱり、ベビイ・オルガンで教則本の三分の一ほどやったのであつた。手首を下げた弾きかたで弾くことを教つた。そのうち或る晩、本郷切通しの右側に

あつた高野とか云う楽器店で、一台のピアノを見た。何台も茶色だの黒だののピアノがある間にはさまって立っていたそのピアノは父と一緒に店先で見たときはそれほど思わなかったのに、家へ運ばれて来て、天井の低い茶室づくりの六畳の座敷へ入れられたら、大きいし、黒光りで立派だし、二本の蠟燭たてにともつた灯かげに燦く銀色の装飾やキイは素晴らしいし、十一ばかりであつた私は夢中に亢奮して、夜なかまでありとあらゆる出鱈目を弾きつづけた。

ピアノの稽古は女学校の二年の末ごろまで続いた。もつとつづくわけであつたところ、久野さんが指にヒョーソーが出来て大変長く稽古が休まれた。その間に、規則的な稽古はいつの間にかす

てられて、本をよむようになり、自分ではいろいろといじりながら、稽古はそれきりになってしまった。

上野で初めて第九が演奏されたのと、久野さんがウィーンに行かれ、やがてそこで命をすてられたのはどっちが先のことであつたろうか。久野さんはおそらく私の生涯に只一人の音楽の先生として記憶される方であろうが、こちらがすこしものを考えるように成長して来た十八九歳の時分には、久野さんの気質やものの感じかたが何だか苦しくうけとられた。芸術家として燃烧する型が外向的であつたからだろう。

音楽と女の生活についての考えかたも一般に狭くあつたと思う。久野さんに習っていて、のち上野のピアノ科に入り、ずっと首席

であつた一人の令嬢が、お媚さんをとるためにどうしても音楽をすてて学校をももう一年というところでやめなければならぬということを、久野さん自身、残念だが仕方がないこととして話されるのをきいた。その娘さんは土方さんと云い、お茶の水の上級生であつた。成美というのが、そのお媚さんであろうと思う。

シオルツ氏についてコンチエルトを弾く位だったひとが、結婚した良人がシントーイスムでピアノにさわれずいたずらに年を経ている例がある。

自由学園の音楽教育などは、日々の常識のなかで、そういう非人間的なものを減らして行く役に立つのだろう。けれども、先日の演奏会をきいたり、観たりして、本当の意味での音楽への愛、

感性を一人一人の若い心の中に目ざめさせ、それを生活の味い深めるものとするのに、ああいう集団効果を、どっちかというところにおどし風に強調した方法が、果して役立つかどうかと疑問に感じた。ヴァイオリンなどひどい姿勢で顎へおしつけて、弓だけ間をはずさずこすっている少女が何人もある。自由学園に子弟をやったりする親たちの或る心持の満足は理解されるけれども。日本の音楽の成長の過程には一面にああいう道も辿らねばならないのであろうか。

〔一九三九年八月〕

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第十七卷」新日本出版社

1981（昭和56）年3月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第4刷発行

初出：「音楽評論」

1939（昭和14）年8月号

入力：柴田卓治

校正：磐余彦

2003年9月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

きのうときょう

——音楽が家庭にもたらしもの——

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 宮本百合子
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>